



グローバル・パートナーシップを推進するための

人材育成およびプログラム開発

- 広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター設立に向けて -

(2005 - 2006)

米日財団奨学寄付金事業成果報告書

平成18年2月

広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター

代表者 小原友行(広島大学大学院教育学研究科)

はじめに

広島大学に在籍する私たちは、これまでに個人として、あるいはグループで取り組んできました、日本とアメリカ合衆国との間をグローバル・パートナーシップによって結びつける多様なプロジェクトの成果を継承・発展させるために、このたび米日財団からの研究助成を受けて本センターを創設することにいたしました。そのきっかけとなったことは、私たちの友人であり、広島大学で学び、その後長く日米間の架け橋のような役割を果たしていただいた故ドナルド・スペンス博士の志を、彼とのかかわりの深かった仲間が集まり、それを広島大学で受け継いでいこうと話し合ったことです。

本センターでは、将来グローバル・パートナーシップを推進していってくれる学生・教員や、学校間連携を推進していくことのできるリーダーとなる人材を育成していきたいと考えています。また、そのために必要な多様なプログラムを開発していきたいと考えています。なぜなら、このことは、社会のグローバル化が急速に進展する今日、近未来の大きな教育課題であるとともに、スペンス博士が願われていた、国際平和の実現を目指した多国間のグローバルな協力関係をより強固なものにしていくことに貢献することになると考えているからです。

本センター設立の理念であり、哲学は、スペンス博士のようなグローバルなマインドやコミュニケーション・スキルをもった人材を多く育成することによって、平和を希求する精神（ヒロシマの心）の普及を目指していくことです。今後とも、ご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター
代表者 小原友行（広島大学大学院教育学研究科）



目 次

. センターの目的と組織	
1. センターの目的	1
2. センターの組織	1
. 本年度事業報告	
1. センター設立のための準備	2
2. センターWeb ページの開設	2
3. 学校間交流国際フォーラムの開催	4
4. ワークショップの開催	7
5. 講演会の開催	8
6. 生徒相互訪問交流事業の支援	8
7. 学生相互交流事業の支援	9
. 本年度事業に対する評価	
1. 学校間交流国際フォーラムの参加者アンケート	10
2. GPSC 評価者による外部評価	11
3. 本年度事業の成果と課題	12

. センターの目的と組織

1. センターの目的

本センターの目的は、多様な国際交流・国際協力の活動を展開することを通して、日米両国の教員・学生・児童生徒の相互理解と協力を促進することである。そのために、具体的には次の目標の実現を目指す。

情報発信：センターの Web ページを開設し、過去のプロジェクトの研究成果（日本語・英語）を開発した教材や資料、GPSC に関する情報、広島や平和に関する資料紹介などの情報を発信する。

人材育成：リーダー養成のためのワークショップの開催、小中高教員の相互訪問、児童生徒の相互交流（実体験型・バーチャル体験型）、教員志望の学生・大学院生等（現職教員を含む）の相互体験型海外教育実地研究の支援などの国際交流活動を通して、グローバル・パートナーシップを推進する人材を育成する。

プログラム開発：日米両国の教員による共同研究やワークショップを通して、グローバル教材や学習指導法の開発・実践・検証、姉妹校関係の締結・継続の方法論の開発などを行う。

2. センターの組織

センター長：小原友行（広島大学大学院教育学研究科教授）

研究員：深澤清治（広島大学大学院教育学研究科教授、人材育成担当）

朝倉 淳（広島大学大学院教育学研究科助教授、プログラム開発担当）

神山貴弥（広島大学大学院教育学研究科助教授、情報発信担当）

研究協力者：上之園強（広島大学附属東雲小学校副校長）

須本良夫（広島大学附属東雲小学校教諭）

鹿江宏明（広島大学附属東雲中学校教諭）

三樹正典（広島大学附属東雲中学校教諭）

見藤孝二（広島大学附属三原小学校副校長）

石井信孝（広島大学附属三原小学校教諭）

木本一成（広島大学附属三原中学校教諭）

松尾砂織（広島大学附属三原中学校教諭）

海外研究協力者：キャロリン・レッドフォード（イーストカロライナ大学）

ベティ・ピール（イーストカロライナ大学）

アンナ・リオン（イーストカロライナ大学）

研究アドバイザー：米川英樹（大阪教育大学留学生センター長）

二宮 皓（広島大学副学長（国際担当））

石井眞治（広島大学副学長（附属学校担当））

評価者：溝上 泰（広島大学監事、前鳴門教育大学長）

中原忠男（広島大学大学院教育学研究科長）

マリリン・シーラー（イーストカロライナ大学教育学部長）

・本年度事業報告

1. センター設立のための準備

(1) センター設立準備会の開催

グローバル・パートナーシップ・スクール・センター（GPSC）設立のために、センター協力研究員予定者に対して GPSC の概要説明を行い、今後の GPSC の活動や運営に関する意見交流を行った。

日 時：2005 年 3 月 1 日 18:30 - 21:00

場 所：広島アークホテル

参加者：センター研究員 4 名、センター協力研究員予定者 8 名

内 容：センター代表者挨拶

GPSC 概要の説明

- 1) これまでの取り組みと展望
- 2) 目的・目標
- 3) 組織
- 4) 活動
- 5) 期待される効果
- 6) 準備状況（Web ページの作成状況）

意見交流

(2) センター設立に向けた海外研究協力者との打ち合わせ等

GPSC 設立準備のために米国訪問を行った。

日 程：2005 年 3 月 23 日～4 月 1 日

訪問者：センター研究員 4 名

- 内 容：1) これまで学生や教員交流活動を協力して進めてきた米国イーストカロライナ大学教育学部の大学教員（マリリン・シーラー学部長、キャロリン・レッドフォード氏、ベティ・ピール氏、アンナ・リオン氏）との会合
- 2) 米日財団関係者（プログラム担当兼理事長補佐：ディビッド・ジェインズ氏）との会合
 - 3) 故ドナルド・リー・スペンス博士の家族を表敬訪問
 - 4) リーダー育成プログラムに関する資料収集

2. センター Web ページの開設

GPSC の情報発信の拠点として、センター Web ページを開設した。この Web ページを通して、センターの活動およびその成果等を報告する。Web ページは、日本語版と英語版によるミラー・サイトになっている。Web ページの URL および構成は以下の通りである。

(1) Web ページの URL

日本語版 URL <http://home.hiroshima-u.ac.jp/gpsc/>

英語版 URL <http://home.hiroshima-u.ac.jp/gpsc/english/>

(2) Web ページの構成

1) GPSC について

- ・センター長あいさつ（センターの概要）
- ・センターの目的
- ・ドナルド・リー・スペンス博士について

- ・センターの組織
- 2) これまでの米日財団助成プロジェクトの成果
 - ・「アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究」(1993-1995)
 - ・「グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト」(1999-2002)
- 3) 地球市民の育成を目的とした学校間交流活動
 - ・グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトによる姉妹校交流活動
 - ・海外の学校との交流ノウハウ
- 4) 地球市民の育成を目的としたリーダー育成活動
 - ・グローバル・リーダー育成のためのワークショップ
 - ・グローバル・リーダー育成のための学生交流活動
- 5) 地球市民の育成を目的としたプログラム開発
 - ・グローバル教育教材・カリキュラム



3. 学校間交流国際フォーラムの開催

広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター（GPSC、通称：ドナルド・スペンス・センター）の創設記念事業として、学校間国際交流フォーラムを開催した。フォーラムの概要をおよび第2部・シンポジウムでの各パネリストからの提案概要は以下の通りである。

(1)フォーラム概要

日時：2005年7月30日 13:00-17:00 場所：広島ガーデンパレス 参加者：68名

内容：開会行事（13:00-13:15）

- ・小原友行（GPSC センター長）挨拶
- ・牟田泰三氏（広島大学長）挨拶
- ・キャロリン・レッドフォード氏（イーストカロライナ大学准教授）挨拶

第1部 GPSC Web ページの完成披露会（13:15-14:30）

- ・Web の構成について
- ・学校間交流活動の紹介（広島大学附属東雲中学校、附属三原小・中学校から）

第2部 シンポジウム(14:45-16:45)

「グローバル・シティズンシップの育成 - 学校間交流の可能性と挑戦 - 」

- ・コーディネーター
深澤清治（広島大学大学院教育学研究科教授）
米川英樹氏（大阪教育大学留学生センター長）
- ・パネリスト
ディビッド・ジェインズ氏（米日財団理事長補佐）
高木洋子氏（NPO 法人 JEARN 理事長）
キャロリン・レッドフォード氏（イーストカロライナ大学教育学部准教授）
中山修一氏（広島大学名誉教授、平和貢献 NGOs ひろしま理事長）

閉会行事（16:45-17:00）



(2)シンポジウム「グローバル・シティズンシップの育成 - 学校間交流の可能性と挑戦 - 」における各パネリストからの提案概要

ディビッド・ジェインズ氏（米日財団理事長補佐）

米日財団を代表してジェインズ氏は、まずスペンス先生の遺志を継いで、牟田学長を初め広島大学の教員がチームとして GPSC を設立したことに祝辞を述べられた後、次の2点について話された。

1) ドン・スペンス氏の人柄そして GPSC にかけた思い

米国に渡った最初の日本人で日本の開国時に力を尽くした中浜万次郎と、彼を助けた捕鯨船の船長と

の子孫の交流から日米で姉妹都市が誕生した。そしてこのようなことの始まりはたった一人の人間であったことから、二つの文化に橋を架けるような大仕事も実は、人と人との交流があって可能となる。そして、その橋渡しの役割を果たしたのがまさにスペンス先生であり、技術の発展とともに電話、インターネットが生まれても、結局文化をつなぐのは、人々が実際に長い距離を旅して実際に言葉を交わすことであって、そうして本当のコミュニケーションが成立する。

2) GPSC に託されたビジョン

スペンス先生には日本、そして教育に対する情熱、日米の学校間交流を進めようとするビジョン、そしてそれを実現させる知性があった。

そして、スペンス先生のビジョンとして GPSC を通して、これまでに培った学校間パートナーシップを維持、発展すること、GPSC が仲介役として新しいパートナー校を作っていくこと、今までに学んだことを継承していくこと、これから交流を始める学校を支援していくこと、を願っており、彼の遺志を継承していくことを期待したい。これまでの経験を埋もれさせずに広めていくことに力を合わせていただきたい。



高木洋子氏 (NPO 法人 JEARN 理事長)

高木氏からは、自らが理事長を務める JEARN (Japan Education and Resource Network) およびその国際組織である iEARN (International Education and Resource Network) の活動を紹介し、インターネットを介した国際協働学習の実際を示すとともに、こうした学習を通して「子どもたちを世界へ」導くグローバル教育の重要性、そして国際協働学習を進めるにあたってこれを取り持つコーディネーター養成の必要性について話された。提案内容の概要は次のとおりである。

1) JEARN および iEARN の役割

インターネットが整備され今や世界中のどこにでも誰とでもつながる環境は整ったが、必ずしもそれがうまく生かされていない。JEARN および iEARN は、情報とコミュニケーションの技術を活用し、子どもと子ども、先生と先生、学校と学校、そして国と国を結ぶ取り組みを支援する組織である。

2) iEARN の活動紹介

- ・150 以上のプロジェクトとフォーラム
- ・お薦めの 20 のプロジェクト (テディベア・プロジェクトなど)
- ・ヒューマン・ネットワークを築く国際会議の開催



3) iEARN の活動が世界中に広まっている原動力

- ・ヒューマン・ネットワーク
- ・子どもたちのポテンシャル (感性と行動力)

4) 時代はすでにグローバル教育へ

先生のためらい (外国語やパソコンが苦手) が、子どもの学習機会を奪っていることはないであろうか。時代はすでにグローバル教育の時代であり、子どもたちを世界へ誘う支援を、JEARN および iEARN は行っている。

5) 今後の課題は、グローバル教育をコーディネートする人材の養成

キャロリン・レッドフォード氏 (イーストカロライナ大学教育学部准教授)

レッドフォード氏の提案は、「Building Bridges of Understanding with Global Education」という題目で行われた。レッドフォード氏は、これまでのグローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトの経緯や成果、及び大学におけるグローバル教育の授業などを踏まえ、グローバル教育の重要性を指摘するとともに、その内容と方法について具体的な事例を挙げて提案した。提案内容の概要は次のとおりである。

1) Understand Self to Understand Others

人を理解するためには、自分理解が必要である。アイデンティティーには、民族をはじめ様々な文化的な要素が関係し、それが自分のものの見方・考え方に影響している。

2) Comparing Culture with Others in the Classroom and Beyond

いろいろな人の、文化、価値観、行為・考え方のパターンなどの関係を検討したり、自分自身に影響している文化的な諸要素を書き出したりして試みるのが有効である。

3) Developing Multiple Perspectives: Experiencing Japanese and American Cultures

他の視点から自分の文化や国を見ること、及びそのような見方を学ぶこと、また、異文化における体験は非常に重要である。教師は、このような点から、生徒の多角的な見方・考え方を育成する必要がある。

4) Experience and World-Mindedness

いろいろな具体的な文化を体験することとともに、その深層にある文化を理解することが重要である。

5) Addressing Global Issues and Problems

このような学習を生かして、現実のグローバルな問題を取り上げた学習を展開することができる。



中山修一氏(平和貢献 NGOs ひろしま・理事長、広島経済大学・教授、日本ユネスコ国内委員会・委員、広島大学名誉教授)

中山氏の提案は、「日本の NGO から学校間国際パートナーシップ交流への期待と課題」という題目で行われた。その提案概要は、以下に示すとおりである。

1) はじめに

国際理解教育は、広島大学では、内海先生、永井先生、溝上先生とつながってきた。その伝統を GPSC は受け継いでほしい。

現在ユネスコで大きな課題となっているのは、「国連・持続可能な開発のための 10 年」(DESD) という考え方である。この考え方を、GPSC は生かしてほしい。

2) 日米学校間交流への期待

国際市民的資質の育成への寄与を期待したい。

・ユネスコの基本的な考え方は、International Citizenship の育成である。

・アメリカ合衆国の考え方は、Global Citizenship であろう。

アメリカの単独行動主義対日本の 1 国平和主義の溝を埋めるロードマップが求められているのでは。

国際標準となる目標は、ユネスコ精神である。それは、「非暴力、寛容、平和の文化を築くこと」である。

その実現に向けて、「国連・持続可能な開発のための教育の 10 年」(DESD) という考え方が提唱されている。それは、『学習：秘められた宝』(21 世紀教育国際委員会報告) や「地球憲章」(The Earth Charter , 2003 年ユネスコ採択) 「ミレニアム開発目標 (2000)」の中にみられる。



* 「地球憲章」 生命共同体への敬意と配慮 , 生態系の保全 , 公正な社会と経済 , 民主主義 , 非暴力と平和

* 「ミレニアム開発目標」 極度の貧困と飢餓の撲滅 , 初等教育の完全普及 , ジェンダーの平等 , 女性の社会参画の達成 , 子供の死亡率削減 , 妊産婦の健康の改善 , HIV / エイズ , マラリアなどの疾病の蔓延防止 , 持続可能な環境作り , グローバルな開発パートナーシップの構築

3) 「国連・持続可能な開発のための教育の10年」(DESD)

これは、2002年に日本政府とNGO団体が世界に提案し、国連総会での「国連の10年」として決議されたものである。

そして、2003年にユネスコが主導機関として指名される。

それは、2005年から10年間の世界平和を目指す国際社会改善運動であり、世界中が、日本の官民あげての取り組みに注目している。

また、日本の市民の提案が世界に受け入れられるかどうかという問題でもあり、NGO・NPOの質の向上が問われている。

4) 日米学校間交流におけるNGOと大学の連携の課題

GPSCは、NGOの調査研究能力の向上や学生の調査研究(論文作成)支援のため、連携しながらインターン受け入れを考えてはどうか。

学生の現地スタディツアーの受け入れも大切である。

児童・生徒の現地スタディツアーの受け入れも可能である。

国際交流協力人材養成講座の協同運営も考えられる。

5) おわりに

これから10年後、世界は「持続可能な社会」を実現できているかどうか。それに果たす教育と学習の役割は大きい。

その中心として、国際理解、文化間理解、国際交流、国際協力が大切である。

そのためには、教育を「オリンピック型」から「万博(エキスポ)型」へ変えて行くことも必要である。それには、世界の教育の価値を、「和」に求める必要がある。

4. ワークショップの開催

地球市民の育成を目的としたリーダー育成活動の一環として、主に教員を対象とした次に示す内容のワークショップを開催した。

日時：2005年5月25日 17:00～18:30

会場：広島大学附属三原小学校図書室

講師：キャロライン・レッドフォード氏(イーストカロライナ大学)

マリー・コービン氏(イーストカロライナ大学)

参加者：広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校教諭20名、GPSCから3名、広島大学大学院生3名

テーマ：「グローバル・パートナーシップを通して文化交流」

内容：文化をどのように定義するか？

パートナーシップをわかち合うための活動(私の大切なもの、私の年表)

私たちの文化を調べる

グローバルな教育者に求められるもの

ア ステレオタイプとエキゾチックイメージの脱皮

イ 多面的視野の拡大と究明

ウ 世界的視野での洞察

エ 文化間学習の経験

フィールドトリップ・シナリオの活動

私の州や県を理解(文化の比較：相違点と共通点)

グローバル教育とは

ア 世界中の人々、国家、文化、論争問題についての知識をもった市民の育成

イ 世界に影響を与えることができる市民の育成

私たちの役割

5. 講演会の開催

アンドリュー・エファート学部長（マサチューセッツ大学教育学部）によるミニ講演会を開催した。

日時：2005年6月17日 13:10～14:10

会場：第1会議室（広島大学大学院教育学研究科）

参加者：30名

講演内容：「アメリカ合衆国における学校改革」

- (1) アメリカ合衆国の文化・社会のキーワード（参加者から）
- (2) アメリカ合衆国における学校改革を次の3つの視点から考える。
インプット・・・条件、原因、背景
プロセス・・・開発、取り組み
アウトカム・・・結果、成果
- (3) スプートニック・ショック以降、繰り返し改革が叫ばれる。社会停滞の犯人として常に学校教育が問題とされる。
- (4) 1983年レポートで教育危機が問題となる。
- (5) 学力低下が問題となり、1993年教育改革条例で、スタンダードづくり、能力開発、教師力の向上が課題とされる。改革のプロセスにおけるその対応として、次の4点が指摘される。
フレームワーク， スタンダード， 予算， 説明責任
- (6) これ以降、スタンダード・ベース・リフォームが進められ、教育が州レベルでコントロールされるようになる。教育関係者は、予算が付けられるので、それを受け入れる。
- (7) 1998年、テストの結果、教育改革が実現していないことが判明。教師はテストスコアを上げることにやっきになる。それ以降、学校の差別化が始まる。
- (8) 2001年、ブッシュ政権は、このような状況の適切な改善がなければ教育予算をつげなくなり、アウトカムはテストスコアが中心となってしまった。特に、テストされる数学と国語の分野が中心となり、テストされない社会科や音楽は軽視される。
- (9) このような対応が学校教育改革と言えるだろうか。これからは、プロセスを考える際に、教師教育、授業力の向上に力を入れることが必要である。教師力の向上という点では、日本の取り組みやその成功を、アメリカ合衆国も参考にし、取り入れたい。



6. 生徒相互訪問交流事業の支援

広島大学附属東雲中学校(日本国広島県広島市)とエクスプローリス博物館立エクスプローリス・ミドルスクール(米国ノースカロライナ州ローリー市)との生徒間相互訪問交流を支援した。両校は、相互訪問を通して、パートナーシップを深めるとともに、今後の交流の発展への道筋を確認した。また、共通テーマに基づく授業実施によって、親睦だけでなく国際問題についての学習内容を深めることができた。

(1) エクスプローリス・ミドルスクールからの第2回訪問受入支援

受入期間 2005年6月17日(金)～6月26日(日)

受入人数 生徒6名 教員3名

主な活動内容 ホームステイ 歓迎式 授業参加 平和公園・平和記念資料館見学
広島市長表敬訪問 送別会・送別式

日本生活科・総合的学習教育学会授業公開及び授業研究会参加

主な支援内容

- ・受入れコーディネート支援
- ・見学・訪問付添
- ・授業公開・研究会参加内容作成支援
- ・パートナーシップの継続・発展の協議



(2) エクスプローリス・ミドルスクールへの第3回訪問支援

訪問期間 2005年8月20日(土)～8月28日(日)

訪問人数 生徒7名 教員等4名(コーディネータを含む)

主な活動内容 ホームステイ 歓迎式 授業参加 文化・自然体験 博物館・美術館見学
送別会・送別式

主な支援内容 訪問コーディネート支援 訪問引率 体験・見学・訪問付添
授業参加支援 パートナーシップの継続・発展の協議



7. 学生相互交流事業の支援

前年に続いて、広島大学との大学間協定校であるアメリカ合衆国ノースカロライナ州イーストカロライナ大学のティーチング・フェロー(教員志望学生)8人が指導教員2名とともに広島を訪れた。

受入期間：2005年5月24日(火)～31日(火)

主な活動内容：

滞在中、広島大学附属三原幼稚園・小中学校、同東雲中学校を訪問し、授業で絵本を読んで聞かせたり、課外活動に積極的に参加したりして生徒との交流を持った。さらに、広島の観光地宮島を訪れたり、中学生の家でのホームステイも体験した。また、教員を目指す教育学部学生との交流会に参加したり、大学周辺のショッピングセンターで大学生と一緒にショッピングを楽しんだ。

主な支援内容：受入れコーディネート支援、見学訪問付添

・本年度事業に対する評価

1. 学校間交流国際フォーラムの参加者アンケート

・3. で報告し学校間交流国際フォーラムの参加者に対して、フォーラム終了後、アンケートを実施した。そのアンケート内容および結果と考察を以下に示す。

【アンケート内容】 フォーラムを知った経緯（6項目の中から1つを選択） GPSCのWebページに対する興味（5段階評定：とても興味を感じる～ほとんど興味を感じない） シンポジウムの内容に対する満足度（5段階評定：とても満足～とても不満足） フォーラムに対する感想、GPSCに対する今後の期待（自由記述）

【結果と考察】

参加者68名中、28名からアンケートへの回答を得た（回収率41.2%）

（1）フォーラムを知った経緯

最も多かったのは「GPSC関係者など人づてに」で16名（57.1%）、次いで「GPSCからの案内状」で10名（35.7%）であった。残りは、「広島大学ホームページ」1名（3.6%）、「中国新聞ホームページ」1名（3.6%）で、「GPSCホームページ」「中国新聞」はともに0名であった。GPSCホームページについては、フォーラム開催前に開設したばかりであったため、まだほとんど認知されておらず、そのためにこれを介してフォーラムを知った人もいなかったと思われる。今後は、こうしたフォーラムなどを開催することを通して、地道にGPSCの活動やWebページについて知らせていく必要がある。

（2）GPSCのWebページに対する興味

GPSCのWebページに対する興味の平均値は、5段階評定中4.4ポイントであった。これはわれわれが掲げたグローバル・マインドをもった人材を育成していこうとする活動の趣旨や、そのためにWebページを介して情報発信をするという方針、また発信内容が支持された結果と考えられる。

（3）シンポジウムの内容に対する満足度

シンポジウムの内容に対する満足度の平均値は、5段階評定中4.3ポイントであった。このように高い満足度が得られたのは、今回の企画「グローバル・シティズンシップの育成」に参加者が賛同するとともに、パネリストからの提案が参加者に興味を持たせる内容であったためと考えられる。

（4）フォーラムに対する感想とGPSCに対する今後の期待

フォーラムに対する感想としては「GPSC設立の趣旨がよく理解できました。シンポジウムでは各パネリストの方の話も時間的ゆとりがあって十分聞くことができました。特に高木氏の活動を詳細にもっと知りたいと興味をもちました。特別なことではなく人と人が普通につながっていくことを子どもたちに広げていくことが気軽にできるといいなと思いました。すばらしいフォーラムでした。ありがとうございました。」など好意的なものがほとんどであった。GPSCに対する今後の期待としては「具体的な例（交流の）が今後、どんどん発信されることを望んでいます。本校でも、昨年よりカナダの学校と交流をはじめたところであり、今後色々と教えていただけたらと思います。」「学校間交流の方法・手順なども情報提供いただければと思う。」など情報発信に対する期待、「日米間だけでなく、本当の意味のグローバルになるように期待しております。」といった今後の活動展開に対する期待、「次回の会ではこれからの具体的な活動の成果が聞けるのを楽しみにしています。」といった次回のフォーラムに対する期待が寄せられた。今後、これらの期待に応えられるよう、活動の充実に努めていきたい。

2. GPSC 評価者による外部評価

本センターが初年度に実施した事業に対しての GPSC 外部評価者・溝上 泰（広島大学監事，前鳴門教育大学長）氏から寄せられたコメントは以下の通りであった。

(1) グローバル・パートナーシップ・スクール・センター創設の意義

この度，米日財団の助成を受けて，広島大学大学院教育学研究科の小原友行教授，深澤清治教授，朝倉 淳助教授，神山貴弥助教授を中心に，イーストカロライナ大学のキャロライン・レッドフォード先生，ベティ・ピール先生，アンナ・リオン先生や広島大学附属東雲小・中学校，広島大学附属三原小・中学校の先生方の協力を得ながら，「広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター」（GPSC）が設立されたことを大いに喜びたい。本センター設立の意義としては，次の3点を指摘することができよう。

第1は，本センターの目的が将来グローバル・パートナーシップを推進していってくれる教員や，学校間連携を推進していくことのできるリーダーとなる人材を育成することとなり，そのことは，「平和を希求する精神」という広島大学の理念にもつながるものであるが，国際化時代の重要な今日的な教育課題に応えるものになっていることである。特に，日米の相互理解の推進や日米間のグローバルな協力関係をより強固なものにしていくことに大きく寄与すると考えられる。

第2は，本センターの設立によって，これまでに広島大学が中心となって進めてきた国際理解・国際交流プロジェクトに参加した広島県内外の教員や，グローバル・パートナーシップ・スクールを推進している各学校の関係者，そして国際交流に関心をもつ広島大学の留学生との間のネットワークを作ることを可能になったことである。また，それは，日本国内だけでなく，アメリカ合衆国におけるプロジェクトチームとの連携・交流を盛んにすることができる。

第3は，本センターがウェブサイトを開設したことによって，国際交流学習に関心をもつ多くの教員が授業づくりにおいて活用することや，学校間交流を進めようとしている学校にその方法やプログラムを提供することを可能にしていることである。

(2) グローバル・パートナーシップ・スクール・センターへの期待

創設されたばかりのグローバル・パートナーシップ・スクール・センターではあるが，今後の発展に向けての取り組みとして，次の2点を期待したい。

第1は，日米両国においてのワークショップやセミナーの重視である。国際交流・国際協力を推進するリーダーの養成や，パートナーシップづくり，そしてパートナーシップ・スクールづくりを促進させるための事例や方法を提供していくことが必要であろう。

第2は，直接体験型の国際交流・国際協力の推進である。相互理解や国際理解にとって，直接その国を訪問して交流や友情を深めることほど重要なものはない。優れた教員の養成を特色とする広島大学とイーストカロライナ大学の連携による教育力を生かした教育プログラム，例えば，現在も行われているアメリカ側の教員志望の大学生・大学院生を受け入れての日本での教育実習の拡充，教員を目指す広島大学の大学生・大学院生をアメリカ合衆国に引率して行う海外体験型教育実地研究の推進，小中高教員の相互訪問の支援など，直接体験型の多様なプログラムを開発していくことも重要である。

3. 本年度事業の成果と課題（センター長 小原 友行）

(1) 本年度の成果

グローバル・パートナーシップ・スクール・センターの本年度の成果は、次の3点である。

情報発信

グローバル・パートナーシップ・スクール・センターのウェブページを立ち上げ、1993年度～1995年度米日財団助成で「アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究」（代表 溝上泰）、1999年度～2002年度米日財団の助成で「グローバル・パートナーシップ・スクールプロジェクト」（代表 ドナルド・スペンス）、広島大学附属三原小学校・同中学校や広島大学附属東雲中学校におけるグローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトによって締結された日米姉妹校の交流実績を掲載することができたこと。

ネットワークの再構築

日本および米国におけるこれまでのプロジェクトのアセスメントとこれからの活動の企画会議の開催、これまでのプロジェクト参加者や国際交流に関心をもつ教員・留学生を集めた「学校間交流国際フォーラム」の開催、グローバル・リーダー養成のためのワークショップの開催、マサチューセッツ大学教育学部長によるミニ講演会の開催などのグローバル・パートナーシップ・スクール・センター主催の行事を通して、またアメリカ合衆国各地のプロジェクトとの情報交換を通して、国内およびアメリカ合衆国との人的ネットワークを再度構築することができたこと。

人材育成

広島大学附属三原小学校とウォールコート小学校・エルムファースト小学校、広島大学附属三原中学校とマーチンミドルスクール、広島大学附属東雲中学校とイクスプロ・リスミドルスクールなどのグローバル・パートナーシップ・スクールの多様な学校間交流活動の支援、イーストカロライナ大学の教員志望学生を受け入れての体験型教育実地研究指導の支援などを通して、グローバル・シチズン育成の基礎づくりを行うことができたこと。

(2) 来年度に向けての課題

グローバル・パートナーシップ・スクール・センターは、来年度、次の3点を中心に活動を展開していきたい。

ウェブページの更新

- a. グローバル・パートナーシップ・スクール・センターが新しく開発した学校間交流プログラムやグローバル教材の掲載
- b. 資料のデータベース化

国際交流活動

- a. アメリカ側の教員志望大学生の受け入れ（教育実地研究）
- b. 教員を目指す広島大学の大学院生（現職教員大学院生を含む）対象の海外体験型教育実地研究（集中講義）の実施
- c. グローバル・パートナーシップ・スクールの発掘と締結
- d. 具体的な学校間交流活動の支援

ワークショップ

- a. グローバル・リーダー養成のための「第2回学校間交流国際フォーラム」の開催
- b. 具体的な学校間交流のためのプログラムや、グローバル教材・学習指導法の開発のためのワークショップ
- c. 姉妹校関係の締結・継続の方法論開発のためのワークショップ